

「1人勉強ノート」で、自分で考えて学習する習慣を付ける

秋田県 大仙市立西仙北中学校

文部科学省「全国学力・学習状況調査」で県の平均が全国上位の結果を収め続ける秋田県。その東南部に位置する大仙市立西仙北中学校では、県平均よりも学習時間が少ないことが課題だ。「1人勉強ノート」や成績層に応じた指導で、自ら課題を見付け、解決できる力の育成を図っている。

●背景

授業態度は良いが 家庭学習時間の少なさが課題

大仙市立西仙北中学校は、2012年度、市内の近隣2校が統合して開校した学校だ。緑豊かな田園地帯に囲まれた丘陵上に立地し、落ち着いた学習環境の中で「学び合い 支え合い 高め合い」を目標として、生徒は切磋琢磨している。

生徒は総じて素直で、話を聞く姿勢も身に付いており、学力にかかわらず真面目に授業に取り組む。13年度に入り、チャイムを鳴ら

さない「ノーチャイム」を実践しており、生徒は、8時20分には担任が来なくても朝読書を始め、授業開始時刻には着席して教師を待つ。地域に塾が少ないこともあり、塾に通う生徒は1学年に数人だ。また、保護者は学校の教育活動に協力的で、PTA総会や部活動の支援、校内の奉仕活動などに積極的に参加している。

生徒は、基礎・基本にはきちんと取り組むが、応用的な問題には積極的に取り組まないという。家で全く机に向かわないという生徒はいないが、2時間以上学習する生徒の割合が少なく、平日の家庭学習時間は県平均より

School Data

◎2012（平成24）年に西仙北西中学校と西仙北東中学校が合併して開校。「立志 善心 叡智」を校訓に掲げる。学び合いによる「つなぐ授業」の実践、表現力の向上、小中連携などの諸改革に取り組む。



校長◎佐藤心一先生

生徒数◎207人 学級数◎9学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒019-2112 秋田県大仙市刈和野字田中蟻塚12

TEL◎0187-75-2200

URL◎<http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ns-nishisenbokyutyu1/>

公開研究会◎2013年11月14日（木）

も少ない。

学力方面では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題の正答率が県平均を上回る一方、基礎的・反復的な内容を問うA問題の正答率が低いという。考える力や判断力は育っているものの、漢字や計算問題など基礎・基本の定着が課題となっている。

●家庭学習指導の工夫

内容は任せて、毎日、自分で考えて取り組ませる

家庭学習の習慣化を図るために、同校では、学年ごとに最低限取り組むべき学習時間と分

1人で学べる生徒を育てる

量を設定している。1年生は80分、2年生は90分、3年生は100分だ。佐藤心一校長は、この時間の目標についてこう説明する。

「家庭学習時間の目標を2時間以上にしても、生徒にとってハードルが高く、実行できないでしょう。でも、3年生でも100分であれば、学習が苦手な生徒も出来ると思えるはず。生徒にとって現実的な目標を提示して、まずは毎日、机に向かうことを促しています」

同校の家庭学習指導の特徴の1つは、「1人勉強ノート」の活用だ。宿題以外に、生徒がそれぞれ自分で学習内容を決めて取り組むというもので、規定の分量は、1年生がA4判で1ページ分、2年生はB5判で2ページ分、3年生はB5判で1ページ以上で、自分の課題に応じて取り組むことになっている。ノートは毎朝、担任に提出。担任はアドバイスを励ましなどのコメントを書いて、放課後までに返却する。

学習内容は生徒によってさまざま。その日の授業で学んだ内容を「1人勉強ノート」に改めてまとめ直す生徒もいれば、大きな文字で漢字を数個書くだけの生徒もいる。それほどの違いがあっても、内容は問わない。なぜなら、いちばんのねらいは家庭学習の習慣化にあるからと、2学年担任の佐々木慎太郎先生は説明する。

「生徒が毎日取り組み、ノートを提出すること自体を評価しています。基本的な内容の

反復学習であっても、自分で課題を決めて実行することに意味があると思うからです。きちんと定着すれば、定期考査で少なくとも6割は得点できます。繰り返し取り組む、粘り強さを身に付けることが、高校入学後の学びにも生きてくると考えています」

1年生のある生徒は、ノートに「めあて」を書いてから取り組み、最後にその日の学習内容を自分で「評価」していた。例えば、「めあて」光合成と呼吸の関係について分かりやすくまとめる」「評価」A 分かりやすくまとめることが出来た」など、学習の目標と達成状況を明示し、次の学習に結び付けようとしていた。

また、7、12月には「家庭学習強調週間」



写真1 3年生の「1人勉強ノート」で優秀なものを壁に貼って公開する。生徒間で学習方法を共有することで、高め合う意識を喚起するのねらいだ

大仙市立西仙北中学校校長
佐藤心一 さとう・しんいち
「先生方には、全ての生徒と一緒に考えられるような、良質の問いを授業で投げ掛けてほしい」

大仙市立西仙北中学校
今野悦子 こんの・えつこ
研究主任。国語科担当。「授業では「知の提供」を心掛け、もつと学びたいという生徒の意欲を喚起したい」

大仙市立西仙北中学校
佐々木慎太郎 ささき・しんたろう
2学年担任。数学科担当。「自分さえ良ければ良いではなく、互いに高め合う意識を持った生徒を育てたい」

を実施し、2週間分の学習計画を立てさせて、毎日、前日に取り組んだ内容と時間を記録させる。

長期スパンの宿題で計画の大切さを意識させる

「1人勉強ノート」も宿題も、提出は厳しくチェックする。提出するまで部活動には加させないという方針を、教師全員で共有し、部活動顧問とも連携して、最後までやり切らせることを徹底している。美術科や家庭科などの実技教科も同様である。

宿題は締め切りを1か月後にするなど、十分に時間を設けて取り組みませる場合が多い。提出物を忘れがちな生徒は、期限間際になっ取り組み始めることもあるため、教科担任

が日頃から「きちんとやっているか」などこまめに声を掛ける。

宿題の提出期限に幅を持たせるのは、生徒が自ら先を見通して計画し、物事を進める力を身に付けてほしいというねらいもある。研究主任の今野悦子先生は次のように話す。

「もし家で出来なければ休み時間を使っても終わらせるなど、自分で進行を管理する術を身に付けてほしいと思います。空き間の時間を上手に見付けて取り組む生徒もいれば、宿題をため込んでしまう生徒もいます。定期考査や長期休業の前には、学習計画の指導を徹底するなどして、計画的に学びに向かう力を高めていきたいと考えています」

●授業の工夫

授業最後の演習問題でその日の理解度を自己採点

主体的に学びに向かわせるには、生徒に自分の力を自覚させ、学習しなければならぬという意識を持たせることも大切だ。

例えば、数学では授業の最後の15分を使い、その日の復習プリントに取り組ませ、授業の理解度を確認させる。

生徒はまず、授業の復習的な内容となる「評価問題」に取り組み、その場で答え合わせを行う。評価問題は授業で扱った問題の数字を変えただけの基礎的な問題だ。

「評価問題が解けないまま家に帰すのは教

師として責任を感じるので、出来なかった生徒には授業が終わるまでの15分間に、徹底的に指導します。生徒には少なくとも評価問題が解ければよいと伝え、成績下位層の生徒に『これさえやっておけば大丈夫』という安心感を与えています」（佐々木先生）

プリントは成績上位層のための「チャレンジ問題」も用意しておき、時間内に評価問題を解き終えた生徒は、発展的な問題や次に学ぶ単元の問題に取り組む。「チャレンジ問題」は1人で解いても、周りの生徒と相談しながら取り組んでもよいことにしている。解答も一緒に渡しているため、「どうしてこうなるのか」と相談しながら意欲的に問題に取り組む生徒もいるという。

成績上位層がけん引して皆で高め合う意識を醸成

成績上位層は、他の生徒をサポートする役割も担う。「評価問題」が終わった生徒が他の生徒に教えに行く時は、机の上に自分のノートを広げておき、どのように「評価問題」や「チャレンジ問題」を解いたのを見られるようにしておく。計算式の途中に「立式」「有理化」「素因数分解」などと書いておけば、周りの生徒はそのメモを参考にしながら、自分の問題を解き進めることが出来る。早く終わった生徒は、遅れている生徒を直接指導するだけでなく、自分のノートで他の生徒も助

けることになるのだ。

「分らない子が理解できるように説明できてはじめて、本当の力が付いたといえるのではないのでしょうか。成績上位層の生徒には、聞かれたら教えてあげよう、人が見て分かるノートを書こうと何度も呼び掛けて、皆で高め合う意識を浸透させるようにしています」（佐々木先生）

人を助けることが自分にも返ってくる。そうした意識を浸透させることで、学び合う集団が形成されていく。同校が課外授業以外で習熟度別授業を設けないのは、学び合いから生まれる刺激を重視しているからだ。

「良い発想が出るかどうかは、必ずしも学力とは関係ありません。学び合いを通して、出来る生徒が他の生徒から学ぶこともありま

す。互いに学び合う気持ちさえあれば、学力差は生徒にとってはかえって良い刺激になると考えています」（佐藤校長）

●夏休みの課外授業の工夫

自分でコースを選び実力を客観視させる

夏休みには課外授業を行うが、学力向上をねらう以上に、生徒の意識啓発を行う意味合いが大きい。「数時間の学習ですぐに学力が上がる」とは期待していません。自分の実力を自覚し、もっと学習しなければならぬという意識を持たせることも、課外授業のねらい

1人で学べる生徒を育てる



写真2 夏休み課外授業の「ベーシック」クラスの様子。普段の授業で高校の入試問題に取り組むのは時間的に難しいため、夏休みを利用して良問に挑戦し、力を高めていく

の1つです」と今野先生は強調する。

期間は、1・2年生が3日間、3年生は5日間。教科は国語、社会、数学、理科、英語の5教科で、毎日3〜4時間として、時間割を組む。内容は教科によって異なり、あらかじめプリントを配布し、家で取り組ませておいて授業で解説する教科もあれば、習熟度別に分けて課題に取り組む教科もある。

3年生の数学を例に見てみよう。数学では、成績上位層の「スペシャル」、中位層の「スタンダード」、下位層の「ベーシック」の3クラスに分かれる。どのクラスを受けるかは、生徒自身に選ばせる。1日目は「スペシャル」、2日目は「スタンダード」というように、毎

日クラスを変更することも出来る。自分の学力を客観視して自覚し、どうすればよいのかを自己決定させるためだ。

「スタンダード」「ベーシック」では、教師自作の「天下統一プリント」に取り組む。全国の高校入試から計算問題を集めたもので、いろいろな出題パターンに出来るだけ多く取り組ませて、入試問題に慣れさせることをねらいとする。ユニークなのは問題の進め方。茨城県の入試問題が解けたら、白地図の茨城県部分を塗りつぶす。正解する度に白地図に色を塗り、全ての都道府県を塗り終わったら、晴れて「天下統一」が成る。1問ずつ着実に取り組ませると共に、全て塗りつぶせば「出来た」という達成感も味わえる。「ベーシック」のクラスには、10人程の受講生に対し、教師が2人付き、手厚い指導で課題をやり遂げさせる。

一方、「スペシャル」では、よりレベルの高いプリントに取り組み、一斉授業の形式で解説する。難易度の高い問題に取り組ませることで弱点を自覚させて、モチベーションを喚起していくのである。

● 成果と課題

学ぶことそのものを 楽しむ意識を育てたい

「1人勉強ノート」や「家庭学習強調週間」の導入により、家庭学習時間は順調に増加し

ている。特に、2年生後期の平均学習時間は、12年度7月で67・1分だったが、同12月調査では119・5分と大幅に増え、2時間以上学習する生徒の割合は県平均とほぼ同じになった。

普段の学習の様子にも変化が表れている。2年生以上では、自分から「プリントをください」と苦手教科の教師に申し出る生徒が増えた。自分で弱点を把握し、克服しようとする意識が芽生えているのである。

今後の課題は「いかに生徒に目的意識を持たせられるかにある」と今野先生は述べる。

「生徒が自ら学びに向かうかどうかは、最終的にその生徒の目的意識にかかっています。『あの高校に行きたい』『こういう仕事に就きたい』というビジョンが、学習しようという動機につながります。しかし、夢や目標を持っている生徒が県平均より少ないのが、本校の実情です。将来の夢を持ち、より高い目標に挑戦していける生徒を育てていくことが、結果的に生徒の学力向上にもつながると期待しています」

もう1つの課題は、学びそのものを楽しむ気持ちを育むことであるという。

「生徒の意欲を刺激するような、良質の問いを与えられるかがポイントになってくるはずです。今後も授業改善を積み重ね、生徒が意欲的に学び合う姿を追求していきたいと思っています」（佐藤校長）